

同じマンションの元CA美人人妻と仲良くなって、仕事終わりの足と靴の匂いを嗅がせてもらった話

た
く
さ
ん
臭
い
で
ね
…
?



第一章：憧れの女性

（綺麗な人だなあ…）

仕事終わり、マンション内でよくすれ違うある女性の姿を目にするたび、石田 悠真（いしだ ゆうま）（23）の鼓動は少し高鳴る。



白く綺麗な肌。品のある姿勢。

柔らかな微笑みを浮かべながらマンションのエントランスを歩く女性——笹原 綾乃（ささはら あやの）（30）。

同じマンションに住んでいるらしいと気づいたのは、もう半年ほど前のことだ。

最初はただ「綺麗な人だな」と思っただけだった。

愛嬌のある可愛らしい顔だが、どこか気品高い空気をまとっていて、すれ違うだけでふと姿勢を正したくなるような、そんな印象。

それがやがて、悠真の中でひとつの“特別な感情”に変わっていったのは、ほんの小さな積み重ねからだった。

——笹原さん、元 CA らしいよ。

——結婚してるって。旦那さんはパイロットだとか。

(既婚者なんだ…)

以前、風の噂のように流れてきたそんな情報に、悠真はほんの少し、胸の奥に冷たいものを感じたのを覚えている。

けれどその気持ちは、あくまで静かなままだった。

彼女が“手の届かない存在”であることを前提にした上で、ただそっと、見守るように惹かれていく——そんな距離感がちょうどよかった。

綾乃と会う機会は限られていた。

朝の出勤時のエントランス、仕事帰りの郵便受けの前、週末のゴミ捨て場。

すれ違う際に軽く挨拶を交わす程度。

それだけの接点しかなかったが、不思議と彼女はいつも清潔感に溢れていて、どこか柔らかく、優しい香りがした。

特に、彼女のスラっとした足元には自然と目が吸い寄せられてしまう。

上品なスカートの裾から覗く、細く整った脚。

控えめな光沢のある薄いストッキングに包まれた足首。

そして、今日の彼女の足元には、いくぶん履きこまれていそうな雰囲気的女性らしいストラップサンダルが履かれていた。

恐らく仕事終わりだからだろうか、整った髪や服装に比べ足元だけずいぶんとラフな着こな

し。

しかし決してだらしない感じではなく、むしろ綺麗な彼女の唯一の隙のように見えて妙なエロさを感じながら、悠真は気が付くといつも彼女の足元を目で追ってしまっていた――

(……いいなあ……笹原さん、本当脚綺麗だよなあ……)

エレベーターを待っている間、足が疲れているのか彼女はつま先をもぞもぞと動かすような仕草をよくしていた。

その小さな所作さえもが、悠真の心に確かな爪痕を残していく。

(……笹原さん、今日も仕事だったのかな。確か今は近くの高級レストランでウエイトレス

やってるって噂で……)

同じマンションに住む元 CA の美人ウエイトレス人妻。

本人に確かめた訳ではない噂話ではあるが、悠真の頭の中では既にそのイメージが定着していた。

* *

ある日の午後 9 時を少し回った頃。

会社から帰ってきた悠真がエレベーターのボタンを押したタイミングで、偶然、向こうから歩いてきたのは——綾乃だった。

「あっ、こんばんは。笹原さんもお帰りです

か？」

「はい、パート帰りです。石田さんは、お仕事
終わりですか？ 遅くまで大変ですね」

「まあ……外回りばかりなんで、帰りが遅く
なることも多くて。でも、——笹原さんも、こ
んな時間までお仕事ですか？
なんかレストランで働かれてるって……チラ
ッと噂で聞きましたけど。お忙しいんじゃない
ですか？」

「ふふ、ありがとうございます。ううん、大し
たことはないですよ？
前の仕事に比べたら、ゼーンゼン楽ですから。
……今日はちょっと忙しくて、ずっと歩きっぱ
なしで疲れちゃいましたけどね」

そう言って綾乃は小さく笑った。

(……レストランで働いてるって本当なんだ
……)

エレベーターの扉が開き、二人並んで乗り込む。
静かに閉じられた密室の中で、彼女の体温が少しだけ近く感じられた。

ふと――

悠真の視線は、自然と綾乃の足元に落ちていた。

今日も彼女の足元は薄いベージュのストッキングに、ブラウンのストラップサンダル。

相変わらず彼女の足元からは妙な色気を感じる。

(あれ……)

ふと視線を落とした綾乃のサンダルのつま先部分。

よく見ると、つま先部分のインソールの布地がじんわりと汗を吸って、足指の形に沿ってじんわりと黒く汚れているのが見えた。

親指のふくらみ。人差し指のカーブ。
その跡が汗で滲んで、指の形に沿うようにインソールに転写されていた。

(……嘘だろ)

一瞬で、悠真の鼓動が跳ねた。

いつも清楚で、丁寧で、年上の余裕を感じさせ

る大人の女性。

そんな彼女の、綺麗な足元に——明らかな“履きこまれた”痕跡が残っている。

指の形に沿うように染みついた黒ずみ。

それはまるで、「何度も仕事終わりの足で踏みつけ、足汗をしみ込ませました」という証明のようだった。

(足……蒸れてるんだ……)

目の前の綺麗で可愛い女性のじつとりと湿気を帯びたストッキング越しの足裏に、どんな匂いがこもっているのか。

仕事中にどれほど汗をかき、どんな匂いを発しているのか。

——綺麗な彼女とのギャップに理性が軋む。

(まずい、興奮してくる……)

視線を逸らそうとしたが、逆に脳に焼き付いてしまった。

綺麗な顔立ち、穏やかな声、所作の美しさ。
それらすべてと、サンダルのインソールに見える足指の汗染みのあまりにも鮮烈なギャップが、悠真の心と身体に強烈に刻み込まれていく。

「それじゃあ、私ここで。……おやすみなさい、石田さん」

エレベーターが8階に止まり、綾乃が静かに降

りていく。

小さく会釈をしてから、振り返りざまに見せたあの柔らかな笑顔。

上品で、優しくて、でもどこか気を許してくれているような——あの微笑みに、またしても心を撃ち抜かれる。

「……おやすみなさい」

ぎこちなく返した声が、エレベーターの密室に静かに残る。

扉が閉まり、綾乃の姿が視界から消えた瞬間、悠真の胸の奥から、ずっと押し込めていた衝動が一気に膨らみ始めた。

(……あれ、やっぱり、見間違いじゃなかったよな)

彼女が履いていた、つま先の開いたサンダル。薄いベージュのストッキング越しに、指先が覗いていたその場所——

サンダルの布地が、指の形に沿って黒ずんでいた。

(くっきりと……足指の跡、ついてた……)

あんなに綺麗な女性の足元に。

あんなに優しくて、丁寧で、完璧な所作をする彼女のサンダルに——足汗でにじんだ、蒸れた指跡が、しっかりと残っていた。

(あんな美人なのに……)

その事実だけで、喉が詰まりそうになる。

冷静を装っていた表情の裏で、頭の中では綾乃のサンダルの湿った指跡のことばかりがグルグルと渦を巻いていた。

（レストランでのパートって、ウエイトレスなんだよな。ってことは——）

頭の中で想像が広がっていく。

——制服姿でパンプスを履き、長時間、店内を歩き回る綾乃の姿。

——蒸れたストッキングの中で、汗ばむつま先。
——靴の中でくっつき合う足指、熱がこもって
どんどん湿っていく。

——ようやく仕事が終わってパンプスを脱いだ瞬間、むわっと立ち上がる酸味と汗の匂い——

(……綾乃さんの足って、どんな匂いがするんだろう……)

いつも綺麗で上品で、優しい大人の女性。

だけど——その足元は、ウェイトレスの仕事で蒸れて、パンプスに閉じ込められて、淫靡な匂いを放っているかもしれない……。

そのギャップが、たまらなく興奮する。

(見たい……嗅いでみたい……)

彼女の足。

薄いストッキングに包まれたままの蒸れた足を。

目の前で——鼻先で感じてみたい。

酸っぱく湿った匂いの奥に、綾乃さんらしい甘い香りが少し混じっているような——そんな香りを、思い切り吸い込みたい。

たった一瞬チラッと見えたサンダル汚れが、気づけば悠真の頭の中で、全てを支配していた。

(……綾乃さんの、ウェイトレス姿、見てみたい……)

ただ挨拶を交わし、遠目に見て惹かれるだけの日々だったはずなのに。

彼女の足元に染みついた“**蒸れの跡**”を見て以来、悠真の中で何かが音を立てて崩れていた。

頭から離れない。

(…我慢できない)

その欲望は日に日に膨れ上がっていき、ついに悠真は次の休みに綾乃が働いているレストランへ行くことを決意する。

第二章：制服姿とパンプス足で…

確か店前は――

「Bistrot Lumière（ビストロ・リュミエール）」
だったはず。

洒落た店名。

隠れ家的なフレンチビストロで、口コミも悪くない。

以前、マンション内の立ち話で聞こえてきた噂。

「CA だった笹原さん、最近リュミエールでパートしてるらしいよ」

その一言が、ふと記憶の底から浮かび上がってくる。

（そういえば綾乃さん、土曜日の夜遅くに帰ってくるの、何度か見たことあったな…）

夜の 9 時半過ぎ、手にはレストランの袋、少しだけ疲れたような足取り。

あれはきっとパート帰りだろう。
だとしたら——土曜日は出勤している可能性が高い。

（……土曜日にするか）

即座にスマホを取り出し、検索。
「ビストロ・リュミエール 予約」

予約サイトにアクセスし、土曜日の 19 時にひとりでテーブル席を予約する。

名前と電話番号を入力し、「送信」のボタンを押した瞬間、指先が少し震えていた。

（あとは……綾乃さんがシフトに入ってることを、祈るだけだ）

行くだけで満足するつもりだった。

ただ、彼女が仕事をしている姿を、少し遠くから眺めるだけで――

けれど、その奥底ではすでに、綾乃の足の匂いに触れてみたいという願望が、確実に形を成し始めていた。

* *

そして――待ちに待った土曜日がやってきた。

薄曇りの空の下、悠真は少し早めに家を出て、予約していたレストランへと向かった。

「Bistrot Lumière（ビストロ・リュミエール）」

マンションの最寄駅から徒歩 5 分。

外観はシンプルだが、どこか品のある佇まい。ガラス越しに見える店内の温かな照明と白いテーブルクロスが、非日常の時間を予感させる。

入口のドアをくぐった瞬間、かすかに漂うバターとハーブの香り、落ち着いたピアノのBGM——

まさに“オシャレな大人の空間”と呼ぶにふさわしいお店だった。

案内されたのは、店の奥のテーブル席。

席に着くと、思わず深く息を吐いてしまう。
緊張なのか、期待なのか、自分でもよくわからない高鳴りが胸を叩いていた。

（本当に……いるのかな。綾乃さん）

その時だった。

「いらっしゃいま——……あら？」

声と同時に、視界に現れた女性。

ウエイトレスの制服をまとい、髪を後ろで緩くまとめたその姿。

シックな色合いのワンピースタイプの制服に、足元は薄いベージュのストッキングと、ヒールの低い黒いパンプス。

その姿はあまりにも自然に、完璧に“店の一員”としてそこにいた。

「あ……石田さん？」

悠真の名を呼んだその声に、鼓動が跳ねる。

「え？ あっ……笹原さん……！」

わざとらしくなり過ぎないように、悠真はできるだけ自然な声で返す。

「いや、ちょっとこのお店、前から気になってて……まさかここで働かれてたなんて…。」

——もちろん、それは嘘だった。

けれど綾乃は、驚いたように目を丸くしたあと、

ふっと微笑んだ。

「え～、すごい偶然ですね！ まさかお店で会うなんて思わなかったです」

その笑顔はあくまで自然で、接客としての丁寧さも保っているのに、どこか親しみが感じられた。

「せっかくなんで、ゆっくりしてってくださいね。

ここのお料理、どれも本当に美味しいんですよ？ えっと……この“鴨のコンフィ”とか、“ムール貝の白ワイン蒸し”とか……おすすめです！」

言いながらメニューを指差す綾乃の所作は、まさに元 CA らしい気品に満ちていた。

無駄のない動き、姿勢の良さ、笑顔の作り方—

—
けれど悠真の目は、自然と彼女の脚元へと引き寄せられていた。

控えめな光沢を持つベージュのストッキング越しの脚線。

パンプスのつま先のライン。
立ち仕事をこなしてきたからこそ感じられる、
足元のわずかな疲労感とリアルな湿気の気配。

（本当に……働いてるんだ。ここで、こうして）

あまりに似合いすぎていた。

その制服も、その立ち振る舞いも、そして——
そのストッキング足とパンプスの組み合わせさえも。

胸の奥がじわりと熱を帯びていく。

ここに来て、正解だった。

綾乃の働く姿そのものが、すでに悠真のフェチ心を刺激してやまなかった。

* *

注文を済ませたあと、悠真はグラスの水を一口だけ口に含み、そっと店内に視線を巡らせた。

テーブル数は、およそ二十席ほど。
程よく余裕のあるレイアウトで、隣の席との距離も離れている。

木目調の床と落ち着いたデザインの椅子、天井から吊るされた雰囲気のある照明。

装飾は控えめながら、家具や食器の一つ一つに店主のこだわりが滲んでいるように感じられた。

(……大人の空間って感じだな)

カップル、年配の夫婦、仕事帰りらしき男女のグループ――

テーブルを囲む人々は皆落ち着いた雰囲気、話し声も静かに抑えられている。

そして、その中をすらりと通り抜けていく数名のウエイトレスたち。

皆同じ制服に身を包んでいるはずなのに――その中でもやはり、綾乃の姿だけが自然と目を引いた。

軽やかに、それでいて無駄のない動きでテーブルを回るその姿。

パンプス越しに伝わるヒールのわずかな足音が、まるで舞台のリズムのように心地よく響い

てくる。

(……やっぱり綺麗だな)

どこを見ても隙がない。

なのに、あのサンダルに残った汗の指跡を思い出すと、たまらなく生々しい。

それを知ってしまった自分だけが、この上品な空間の“裏側”を共有しているような——そんな秘密めいた感覚すらあった。

と、そのときだった。

視界の端で、なにか小さなものが転がった。

(……?)

前のテーブルの男性客が、前菜を食べている最中に一粒の豆——グリーンピースのようなものを床に落としたらしい。

小さな丸い粒がコロコロと音を立てるように床を転がる。

誰も気づかないまま、豆は悠真のテーブルの近くまで転がってきて、ピタリと止まった。

(……落ちたな)

特に理由もなく、悠真はその豆をぼんやりと見つめ続けた。

艶のある緑色、丸みを帯びたフォルム。
床の上でポツンと存在している様子が、どこか滑稽でもあり、場違いでもある。

——そこへ。

「お待たせしました〜！」

綾乃の声が近づいてきた。

顔を上げると、ちょうど料理を載せたトレーを持って、笑顔のまま歩いてくる綾乃の姿が目に入る。

悠真は思わず、小さく息をのんだ。

(……もしかして……)

言葉よりも早く、豆の存在に気づいた自分の意識だけが異様に冴え渡っていた。

そして――

「ッ……！」

——プチッ……

綾乃のヒールの低い黒いパンプスの靴底が、迷いもせずにその豆を真上から踏みつけた。

何の躊躇もなく。

食べ物を、床に落ちた豆を、彼女のパンプスのソールが静かに潰した。

「こちらが鴨のコンフィになります。ごゆっくりどうぞ」

涼しい声。

豆を踏みしめたまま、丁寧にプレートを置きながら、にこやかな表情を崩さない綾乃。

悠真はその笑顔に「ありがとうございます……」
と空返事をしながら、意識は完全に足元の豆に
向いていた。

可愛い笑顔を残し、厨房へ戻ろうとする彼女に
会釈をし、すぐさま彼女の足元に視線を移す。

踵を返し、床から離れるパンプス。

その瞬間——

靴底にしっかりと張り付く潰れた豆の痕跡と、
惨めに床に踏み広げられ、ぺったんこになった
グリーンピースの姿が悠真の目に映った。

(やばすぎる……！)

彼女が完全に去ったあと、もう一度ゆっくりと床に目をやる。

さっきまでまん丸だったグリーンピースは、可愛そうな程ぺったりと平面に潰され、床に緑色の汁を滲ませている。

指先が震えた。

（今……綾乃さんが……踏んだんだ）

しかも、まったく気づいていなかった。

それが日常の一部であるかのように、当たり前
の所作として、食べ物を綺麗なパンプス足で踏み潰して通り過ぎていった。

その直後に、悠真に向けられたのは——あの優しい、あまりにも穏やかな笑顔だった。

(清楚で、気品があって、優しくて……)

(……なのに今、自分の目の前で……食べ物を、
踏み潰して……)

脳内で何かが弾けた。

足で踏まれる。

豆が潰れるかすかな音。

その直後に差し出される綺麗な料理と、美しい
笑顔——

あまりにも強烈なギャップが、悠真のフェチ性を
激しく揺さぶっていた。

正直——料理どころではなかった。

鴨のコンフィの芳ばしい香りも、ワインの深い味わいも、すべてが遠くの世界の出来事のように感じられた。

悠真の頭の中を支配していたのは、たった一つ。

あの光景。

(……これ、現実だよな……?)

目の前で。

あの綺麗で上品な綾乃さんが――

グリーンピースを、踏んだ。

何のためらいもなく。

まるでそこに何もなかったかのように、
パンプスの底で、それをプチッと平らに潰して
いった。

(……嘘だろ……)

震える手でフォークを持ち、無理やり料理を口に運ぶ。

だが、味がしない。

いや、味わう余裕がまったく無い。

再び、視線をそっと床へ落とす。

そこには――

惨めに潰され、ぺったりと木の床に張りついた平面のグリーンピース。

かつての丸みなど微塵も無く、
足の圧に潰されて、緑色の中身が広がり、潤んだように床に張りついていた。

(やばい……やばすぎる……)

理性の声が遠のいていく。
体の芯が火照って、妙な汗が背中を伝う。
まるで心拍と呼吸のリズムが合わなくなった
ような、浮遊感。

そのとき――

「お水のおかわり、どうぞ♪お料理どうです
か？お口に合いましたか？？」

再び現れた綾乃。
手には冷えたグラス。

その声も、笑顔も、あまりにも優しくて、自然
で、可愛くて――

「ど、どうも……はい、すごく美味しいです…
…」

なんとか平静を装って返す悠真。
だが声が僅かに掠れているのを、自分でもわかっていた。

綾乃は特に気にした様子もなく、にこやかにグラスをテーブルに置き、「よかったです～」と頷く。

その瞬間——

悠真の視線は、自然と彼女の足元へと吸い寄せられた。

(……まさか……)

そしてその“まさか”は、あっさりと現実になる。

ぬちゅ……

静かな音を立てながら、
綾乃のポンプスの底が、再び、あの潰れたグリーンピースの上に下ろされた。

まるで、残った断末魔を丁寧に均し込むかのよう
に。

足の重さが乗った瞬間、
潰れた豆の中身が床にさらに薄く広がり、
押し広げられるのを感じた。

(……もう無理……)

頭が真っ白になった。

視界の隅に焼き付いた、潰されたグリーンピー

ス。

あの優しい微笑み。

そして——その直後の何気ない一歩。

清楚で可愛らしい綾乃のパンプス足が、平然と食べ物二度も踏んでいった。

その現実、悠真のフェチ性は限界を超えて弾けた。

料理を食べ終え、会計を済ませる頃には、悠真の顔はどこか上の空だった。

「ありがとうございました～！ またぜひどうぞ♪」

店の奥で手を振ってくれる綾乃に、小さく会釈を返して外へ出る。

——夜風が、熱を帯びた頬を少しだけ冷やしてくれる。

(……味、全然覚えてねえ……)

せっかくのフレンチ。
なのに、料理の印象はほとんどない。
記憶に残っているのは——

綾乃の可愛いウエイトレス姿。
優しく微笑む顔。

そして……
惨めに踏み潰された、緑のグリーンピース。

(やばかった……やばすぎる……)

想像を遥かに超える体験に、
全身が火照ったまま、悠真はふらふらとマンションへの帰路についた。

「……はぁ……」

ドアを閉めた瞬間、足元から力が抜けていった。
靴を脱ぎ捨て、そのままの格好でベッドに倒れ込む。

暗い天井を見上げながら、呼吸だけが異様に速い。

(……なんだったんだ、あれ……)

まるで夢でも見ていたような夜だった。

——綾乃のウェイトレス姿。

シックな制服に、まとめられた髪。
そして足元には、薄いベージュのストッキング
に黒のパンプス。

ただでさえ美しい彼女が、仕事着に身を包み、
接客しているという事実。

その姿を目の前にして、すでに心拍は限界に近
かったというのに――

（あの綾乃さんが……目の前で……）

――食べ物を踏み潰した。

しかも、なんの躊躇もなく。
パンプスの靴底で、落ちたグリーンピースをぺ
ったりと平らに。

ぐちゃりと潰されて床に広がった緑色の跡。

そしてそれを踏んだ直後、何もなかったように悠真に向けて見せた——あの、優しい笑顔。

（信じられなかった……でも、見た。確かに俺の目の前で……）

脳内で、何度もその瞬間がリフレインする。
黒いパンプスが床に触れる寸前。

丸かった豆が潰れて平らになる、あの“プチッ”
というかすかな音。

再び床から靴が離れた直後に見えた、変わり果てた惨めな豆の姿。

そして、直後に向けられた綾乃の優しい微笑み。

さらに——

記憶の奥から、別の映像がフラッシュバックする。

——あの日、仕事帰りに偶然見かけた綾乃のサンダルのつま先。

布地が汗を吸い、くっきりと足指の形に黒ずんでいた。

(絶対、蒸れてたよな……)

そう思うだけで、喉が渴いたように熱くなる。

今日だって、長時間の立ち仕事。
ストッキングにパンプス。

靴の中はきっと蒸れていたに違いない。

その蒸れた足で——グリーンピースを踏み潰していったんだ……

（あの足で……あの笑顔で……）

すでに理性は、とうに崩れていた。

綾乃のストッキング足が、
パンプスの底が、
潰された豆のシミが、
すべて脳内で混ざり合い、刺激の塊となって爆
発する。

（無理……もう、我慢できない……）

昂ぶりが限界に達した。

手が勝手に動き、意識が飛びそうになるほどの
熱が全身を駆け抜ける。

ベッドの上、ただ一人——
あまりに強烈な“体験の余韻”に飲み込まれなが
ら——

綺麗で可愛い綾乃の顔と、ウェイトレス姿のパンプスの中の足の匂いを想像しながら、悠真は激しく果てた。

＊ ＊

——あの日から数日経った。

あの夜以来、悠真の中では何かが完全に壊れてしまっていた。

綾乃の足のことしか、考えられない。

あの可愛い笑顔。上品な立ち振る舞い。
そのすぐ下で、蒸れて、汚れて、食べ物を踏み潰していく綾乃の足。

一度そのギャップを知ってしまった今——

もう、頭から離れるはずがなかった。

(……嗅ぎたい……)

(綾乃さんの足の匂い、どうしても嗅いでみたい……)

そしてその数日後、またも偶然の再会は訪れた。

仕事帰りの夜のマンションのエレベーター前。
ふと振り返ると、そこにいたのは——綾乃。

「あっ、石田さん」

軽く手を振りながら近づいてくる綾乃。
変わらない笑顔。華奢な体。ふんわりとした香り。

「この前は、どうも～。ビックリしましたよ～。まさか石田さんが来てるとは思わなくて！」

「いやこっちこそ……本当に偶然でした。まさか笹原さんがあそこで働いてたなんて……」

「ふふっ、ですよね～」

エレベーターが来るまでの間、自然と会話が始まる。

先日の件もあってか、ずいぶんと距離が縮まったように感じる。

綾乃は今日も、薄いベージュのストッキングに、いつもと同じベージュのストラップサンダル。

つま先の生地はまたしても、ほんのりと黒ずん

でいるように見えた。

「今日もレストランでお仕事帰りですか？」

「はい～、今日もずっと立ちっぱなしで……もう足パンパンですよ～。
ずっとパンプスなんで、足も痛いし蒸れるし、大変なんです～」

「……ッ！」

その何気ない一言が、悠真の脳に直接火をつけた。

蒸れる。

パンプスで。
綾乃の足が。

「……笹原さんみたいな綺麗な方でも、足って蒸れるんですね……。ちょっと意外です……。」

「え～、なにそれ～、綺麗だなんて（笑）」

綾乃は恥ずかしそうに笑いながら、軽く肩をすくめた。

「誰だって蒸れますよ～。
恥ずかしいですけど……ストッキングにパンプスなんて、すぐ臭くなっちゃいますから💧」

「……ッ！？」

（……今、綾乃さんが“足が臭くなる”って……自分で言った……）

その事実だけで、全身にゾクッとした熱が走った。

（……もう無理だ）

「……信じられないですよ。笹原さんみたいな綺麗な人の足が臭いなんて……」

ついに口に出して復唱してしまった。

けれど、綾乃は特に怒るでもなく——むしろ、茶目っ気たっぷりに笑って返してきた。

「綺麗だなんて……もう、またそんなこと言っ

て～（笑）」

「そんなに疑うなら……嗅がせちゃいますよ？（笑）」

照れ隠しなのか、いたずらっぽくそう言ってみせたその言葉に、悠真の全身が固まる。

冗談。軽いノリ。

なのにその中に感じる、“明らかに匂いを意識させる言葉”。

彼女の口から「嗅がせる」という単語が出た——それだけで、頭がクラクラする。

「えー、そんなに言うなら……ちょっと嗅いでみたいかも、です…」

必死に平静を装いながら、冗談のノリを崩さないように、でも確実に“踏み込んだ一言”を投げる悠真。

綾乃は目を丸くし、すぐにまた柔らかく笑った。

「あはは……もう、何言ってるんですか（笑）もしかして、石田さんって匂いフェチとかそういう感じだったりして？（笑）」

少しだけ意味ありげな笑みを浮かべながら、到着したエレベーターに乗り込む。

「はは……ちょっとした興味本位ですよ……笹原さんの足が臭いなんて、信じられないですから……。」

（……このまま、冗談じゃ終わらないかもしれ

ない)

エレベーターの扉が閉まる開く音が、やけに大きく聞こえた。

「——もう……石田さんったら」

綾乃は小さく笑いながらも、ふっと何かを決めたような瞳で悠真を見上げた。

「じゃあ、試しに……このサンダル、ちょっと嗅いでみますか……？(笑)

——多分、ビックリしちゃいますよ？」

そう言って、彼女は左足をすっと上げると、そのサンダルを静かに脱ぎ、手に持った。

綾乃の手の中でひらりと傾いたサンダルのインソールには――

くっきりと刻印された、足の跡。

つま先から土踏まず、かかとにかけて。
全体が薄黒く、汗と皮脂で濃く染みついていた。

(……っ！)

それを見た瞬間、悠真の喉が音もなく詰まる。
脳が、焼きつくような興奮の熱で痺れた。

(すごい……こんなに……)

「……サンダル……結構、汚れちゃってますね……」

かろうじて声を絞り出した。

それは興奮を隠すための言葉だったが、口にした途端、自分でも余計に昂ぶっていくのがわかる。

「ふふっ、やだ……言わないでくださいよ、そんな……」

綾乃は顔を少し赤らめながら、指先でサンダル
の縁をなぞる。

「いつもレストランでの仕事終わりにこのサンダル履いてるんで……

どうしても、汗の汚れが付いちゃって……恥ずかしいですけど」

その“恥ずかしい”という言葉が、逆に悠真の興奮をさらに煽った。

羞恥と無防備、そして自分にだけ晒された汚れの痕跡——それがたまらなくリアルで、生々し

い。

(……もう……止まらない)

綾乃が気を変える前に——
悠真は、自然を装いながら言った。

「じゃあ……ちょっと、試しに。嗅がせてもらいますね……」

あくまでも軽く。冗談の延長。
けれど、その手は震えながら綾乃のサンダルを
受け取っていた。

そして——
ゆっくりと、鼻先をサンダルのつま先部分——
最も黒ずんで濃い指跡へと近づけていく。

ほんの数センチ。
サンダルから漂う、ほんのりと湿気を含んだ空
気。

そして――

鼻先が、触れた。

その瞬間だった。

「……ッ…！！」

(……うそ……)

サンダルのゴムっぽい匂いに混じり、ツンツと鼻を突くような酸っぱい匂いがした。

その奥に軽い納豆のような、むわっとした皮脂の発酵したような足特有の匂い。

鼻の奥にこびりつくような、しっかりとした足の匂いだった。

「……………」

だがその奥には、確かに感じる——甘い香水のような女性らしい香りと、ほんのり温かい体温の名残も感じる。

（これが……綾乃さんの……足の匂い……）

後頭部を殴られたような衝撃。
強烈な興奮で、頭の中が一瞬真っ白になる。

あまりにはっきりとした匂いに一度顔を離そうとして——だが離れられなかった。

逆に、もう一度深く、強く、吸い込みたくなるようなクセになる匂い。

「……ほらね？ 言ったでしょ？」

嗅いだ瞬間の悠真の表情の変化を察したのか、綾乃の声が、すぐ隣で微笑んでいた。

その表情は、ほんの少しだけ照れたようで、けれどどこか見透かすような柔らかい余裕を滲ませていた。

ゆっくりとサンダルを鼻から離したその先に

ある綾乃の可愛い顔。

そのギャップに、悠真の意識は揺らいでいた。

「あはは……確かに、ちょっと匂いしますね……」

震える声で、なんとか言葉を返す。

「でも……こんな綺麗で可愛い笹原さんの足の匂いだと思うと……」

全然嫌じゃないです。むしろ……ちょっと好きな匂いです……」

その瞬間、口から本音がこぼれ落ちた。

綾乃の目が、ふわっと見開かれ——

それからまた、やさしく笑った。

「もう～……石田さんったら、また“可愛い”なんてお世辞言って……」

ぷうっと頬を膨らませながら、綾乃はやや拗ねたような仕草を見せた。

「もしかして、年上のおばさんだと思ってからかっているでしょ？ まったく～」

その言葉とは裏腹に、綾乃の表情はどこか楽しげだった。

ふくらませたほっぺも、わざとらしいふりをした目元も——冗談っぽく拗ねてるつもりなんだろうけど、それが逆に本気で可愛い。

(やばい……本当に可愛い……)

「おばさんだなんて……そんなわけないじゃないですか」

少し息が上ずりそうになりながらも、悠真は本音を漏らすように言った。

「こんな綺麗なお姉さんに向かって……お世辞じゃないですよ。

本当に綺麗だと思ってます。……正直、ちょっとタイプですし……」

言葉が止まらなかった。

抑えていたはずの感情が、ゆっくりと口から漏れていく。

「ええ～……なにそれ……石田さんって、ほんと持ち上げるのうまいんだから～」

綾乃は照れたように笑いながらも、悠真に気を許したのか、口調も徐々に崩れていく。

心の距離が、確実に、じわじわと縮まっていた。

「……でも、ありがとう。なんか、ちょっと嬉しいかも」

その言葉に、悠真の胸がきゅっと締めつけられた。

(やばい……やばい……本当に可愛すぎる…
…)

ふと、綾乃が口元に手を当てて微笑む。

「ていうか、“好きな匂い”って……もしかして石田さん、本当に匂いフェチとかだったりして？（笑）」

軽くからかうような声。

けれど、その軽さの奥に、わずかな探るような雰囲気があった。

悠真は一瞬だけ迷って――

「……はい。もしかしたら、そうなのかもしれないですね」

正直に、頷いた。

「誰でもいいってわけじゃないんですけど…

…笹原さんみたいに、綺麗で可愛い女性の足の匂いだったら——たぶん、好きです。……いや、今嗅いで、好きだって確信しました」

そこまで言ってしまった自分に驚きつつも、もはや止まれなかった。

エレベーターの密室。
綾乃の脱がれたサンダル。

鼻に残る仕事終わりの濃い蒸れた足の匂いと、今この距離で微笑む彼女の香りが、脳内でぐるぐると混ざり合っている。

綾乃は、一瞬だけ目を見開いたが——
すぐにふっと、肩の力を抜いて笑った。

「へえ……そうなんだ。

足の匂い、受け入れられたのなんて初めてか

も」

その笑みは、軽蔑や嫌悪とは無縁の、どこか安心したようで、それでいて少し艶を帯びた表情だった。

「私、結婚する前は CA の仕事してたんだけどね？——その時なんて、ずーっとストッキングにパンプスで。

今よりもっと足臭くて、大変だったんですよ～？（笑）」

「え……」

「本当に……夏場の国際線とか最悪だったなあ。10 時間以上ヒールでほぼ立ちっぱなしで、汗こもっちゃってね。

もう、靴脱ぐの怖いくらい臭くて（笑）」

綾乃は懐かしそうに、どこか楽しげに語っていた。

「……………」

「今の旦那にも、付き合いたての頃は“足の匂いやばい…”って驚かれてたっけ（笑）

“可愛い顔して足クサ女だな”ってからかわれたりして……………」

（…………やばい）

悠真の頭の中で、何かがまた崩れた。

清楚で上品な綾乃。

優しく微笑む、年上の可愛い人妻。

その彼女が自分の足の匂いが“やばい”と笑いながら語っている。

——ストッキング足が臭くなることを、本人の口から語っている。

(……これ以上聞いたら、もう俺……)

理性が、完全に軋んでいた。

「……旦那さん、羨ましいです」

エレベーターの静かな密室。

悠真は、思わず胸の内をそのまま口にしていた。

「自分だったら……むしろ疲れた足裏のマッサージとか、毎日してあげたいぐらいですよ」

それは軽い調子を装いながらも、心からの本音だった。

綾乃は目を丸くして、それからふっと笑った。

「え～、それめちゃくちゃ良いかも～。

もっと早く石田さんに出会ってたなら良かったな～（笑）なんちゃってね（笑）」

言葉こそ冗談めいていたが、口調はどこか柔らかく、心地よい温度を帯びていた。

「いやいや……自分なんかじゃ、綾乃さんに釣り合わないですよ」

少し照れながらも、悠真は目を逸らさずに続けた。

「……ていうか、その……旦那さんとはうまく
いってないんですか？」

一瞬だけ、綾乃の表情が曇る。

「んー、仲悪いとかじゃないんだけどね…」

彼女はゆっくりと目を伏せ、ぽつりと続ける。

「国際線のパイロットで、あんまり家に帰って
こないから……なんかね、たまに“これって結
婚してる意味あるのかな”って思っちゃう時
もあるの」

「……」

「まあ、その分、私も色々自由にできるから、
楽ではあるんだけどねー」

軽く笑ってはいたが、どこかに空虚さを感じさせる声色だった。

「でも……やっぱり、ちょっとだけ……夜とか、
寂しくなる時はあるかな」

そう言って、綾乃はチラッと悠真を横目で見ると、

少しだけ、唇の端が緩んだ笑み。
さっきまでよりも、わずかに距離の近づいた視線。

「……そうなんですね。

旦那さんもお仕事、大変なんですね……」

悠真は小さくうなずきながら、けれど視線を綾乃から逸らさなかった。

「でも……こんな美人な奥さんがいるのに、家に帰れないなんてもったいないですね」

「……」

「自分だったら、毎晩即帰宅したくなっちゃいますよ。」

言葉に出してから、さすがに少し言いすぎたかと不安になった。

——だが。

綾乃は、笑った。

「もう～、またそんなこと言って～。

でも……うん。なんかね、石田さんと話したら気分がちょっと明るくなってきたかも」

そして——

「……良かったら、家で晩ごはんでも食べて行く？ 今、旦那いないし」

「……え？ いいんですか？」

思わず出た素直な反応に、綾乃はふふっと肩をすくめた。

「うん。私、こう見えて料理得意なんだよ？
でも作っても食べてくれる人がいなくて、最近ちょっと寂しかったんだ」

「だから……石田さんさえ良ければ、良かったら食べて行って？」

その提案に、悠真の胸が大きく跳ねた。

「……嬉しいです！ありがとうございます！」

それだけでは言い足りず、すぐに続ける。

「お礼に、足裏マッサージでも何でもしますよ！ 本気ですからね？」

「あははっ（笑）じゃあ——お願いしちゃおっかなあ？」

綾乃は声を上げて笑いながら、そのまま自然な流れで、綾乃の部屋の階で二人でエレベーターを降りた。

足の匂い、蒸れ、ストッキング、マッサージ…そして二人きりの部屋——

悠真の抱く欲望のすべてが、今ゆっくりと、確実に現実になろうとしていた。

第三章：綾乃の手料理と…

エレベーターを降り、綾乃の部屋の前に着く。

「どうぞ、上がって？」

玄関の鍵がカチャリと回る音と共に、綾乃が悠真を振り返る。

ドアが開かれ、温かな明かりと柔らかな生活の匂いが広がる空間へ、彼は初めて足を踏み入れ

た。

「お邪魔します……」

綾乃は玄関でサンダルを脱ぎ、軽い足取りでそのまま室内へと上がっていく。

悠真の視線は、無意識のうちに彼女が脱いだサンダルへと吸い寄せられていた。

つま先部分には、汗と皮脂が染み込んだ黒ずんだ足跡がしっかりと残っている。

くっきりと指の形が浮かび、特に親指の部分は沈んだように濃くなっている。

(……本当やばい……)

ほんの今まで、綾乃の仕事終わりの蒸れたストッキング足がぴったりと密着していた場所。

目の前の淫靡な足形のついたサンダルと、さっき嗅いだ匂いを思い出して悠真の股間はどうっすらと熱を持ち、膨らみ始めていた。

「さ、どうぞ～」

リビングへと向かいながら綾乃が声をかけてくれる。

スリッパに履き替えた彼女のストッキング足が、フローリングをぺた、ぺたと踏みしめていく。

歩くたび、後ろからかすかに見える綾乃の足裏。

滑らかに伸びた足首、かかとにほんのり感じられる赤み——

その全てが、目の前にある“現実”であることが信じられないほどに美しかった。

リビングに通され、ソファへ座る。

「じゃ、ちょっと食事の支度するから、座っててね〜」

そう言って、綾乃はキッチンへ向かう。
その背中に、エプロンを結びながら。

(……やば……)

エプロン姿の綾乃が、異様に可愛い。

肩にかかる髪をふわりとかき上げながら、慣れた手つきで食材を並べ、包丁を持つ。

ストッキング越しのスリッパを履いた足裏が、キッチンマットを踏みしめる。

その所作すべてがあまりにも自然で、家庭的で、色っぽかった。

「……そんなじっと見られてたら、なんかやりにくいなあ～（笑）」

綾乃がくすっと笑いながら振り返る。

「ご、ごめんなさい……。」

綾乃さ——笹原さんの、エプロン姿につい見惚れちゃって……」

「も～、またそんなこと言って～（笑）」

くすくすと笑いながら、エプロンのポケットに手を差し込む綾乃。

「本当、石田さんって持ち上げ上手なんだから」

ふと、綾乃が声を少しだけ柔らかくする。

「……ねえ、もしよかったら——下の名前で呼んでもいい？」

名字で呼ぶのって、なんかちょっと堅苦しくって」

「……はい。全然、大丈夫です」

思わず背筋が伸びる。

期待と緊張が胸の奥でじわじわと膨らんでい

く。

「石田さんって、下の名前は？」

「……悠真、です」

「悠真くん、ね。

うん、やっぱこっちの方がしっくりくるや～
(笑)」

軽やかに、でもどこか心地よさを滲ませて、綾乃は“悠真”と呼んだ。

その音が、脳に直接響いてくる。

(……綾乃さんが……俺の名前を……)

胸の奥が、ジワッと熱くなる。

言葉にできない高揚感と、信じられないような嬉しさが広がっていく。

「……あの、もし良かったら……自分も、“笹原さん”じゃなくて、下の名前で呼んでもいいですか？」

「うん、もちろんいいよ？」

綾乃は笑顔で頷いた。

「綾乃って言います。よろしくね、悠真くん」

「……じゃあ……綾乃さん、で」

「うん♪ なんか一気に仲良くなったみたいで、

良いね！」

綾乃は、鍋をかき混ぜながら、振り返って優しく微笑む。

その笑顔は、ふわりと柔らかくて——けれど、どこか大人の女の余裕も含んでいた。

悠真もまた、深く、強く感じていた。
心の距離が縮んだこの時間が、あまりにも愛おしい。

キッチンに立つ綾乃は、どこか楽しそうだった。

エプロンの紐をキュッと結び、
「もうちょっとでできるから待っててね～」と
明るく声をかけてくれる。

彼女が手慣れた動きで野菜を切る音。
香ばしいソースがフライパンで弾ける匂い。

何気ない家庭の光景——けれど悠真には、それが異常なほどに幸福で、眩しく映っていた。

綺麗で、優しくて、仲良くなると結構茶目っ気もあって可愛い綾乃さん……でもその足元は——

——玄関に脱がれた、あのサンダル。

仕事終わりのストッキング足裏を押し付けられ、つま先の部分にくっきりと指の跡が黒ずんで染みついていた。

それは間違いなく、ほんの数分前まで綾乃の蒸れた足が密着していた痕跡。

(……もう一回、嗅ぎたい……)

可愛いエプロン姿の綾乃と、
玄関に残された汗と蒸れの染み込んだサンダル。

そのギャップが悠真の脳を何度も焼き、股間はどうしようもなく膨らみ続けていた。

座った姿勢では誤魔化せないほどに、下半身が熱を持って主張してくる。

(……無理だ……我慢できない……)

「——あの、綾乃さん」

「ん？ 何したの？」

「すみません、ちょっと……お手洗い、お借りしてもいいですか？」

「あっ、うん。廊下の突き当たり、左側だよ～」

にこやかに案内してくれる綾乃に軽く頭を下げながら、悠真はバレないように——玄関へとそっと足を向けた。

心臓がバクバクと音を立てる。
指先がわずかに汗ばむ。

だが、後ろからはキッチンでソースを混ぜる音だけが、静かに耳に届く。

(……今なら、いける)

玄関に近づき、サンダルの前で足を止める。

そこには、さっき綾乃が脱いだばかりのサンダル。

つい数分前、綾乃のベージュストッキング足裏が密着していた“現物”。

迷うことなく――

サッとサンダルを手取る。

そして、息を殺すようにしてトイレへ向かい、そのまま中に入った。

ドアを閉め、鍵を回す。

密室。

静寂。

そして、自分の手の中にある、綾乃の匂いの痕跡。

(……少しだけ……少しだけだから)

自分に言い聞かせるように、震える手でサンダルを目の前に持ち上げる。

便座に座り、まじまじとサンダルを見つめる。

これが……綾乃さんが履いていた——

さっき、エレベーター内でふざけ半分に嗅がされたあのサンダル。

その時はほんの数秒、香りを確かめるように軽く鼻を寄せただけだった。

けれど今——

誰にも邪魔されない密室のトイレの中で、改め

て目の前にあるそのサンダルをじっくりと観察する。

靴底は黒く汚れすり減り、全体的に薄汚れ、踏んだゴミのような物も張り付いている。

明るい白とベージュ色だったであろうインソールは、すっかり綾乃の足裏の形に黒く染まっている。

つま先からかかとへと続く黒ずみ。

特に親指と人差し指が当たっていたあたりは、汗と皮脂が濃く染み込み、くっきりと指跡が刻印されていた。

(……これが……綾乃さんの足の……跡……)

たまらなく、愛おしい。

そして……どうしようもなく、興奮する。

彼女の、綺麗な顔。

優しくて、可愛くて、無防備な笑顔。

——その下にあった、普段は誰にも見せない
“蒸れた足”。

(……こんなにも濃く、跡が……)

興奮で、指先が小刻みに震える。

もう、自分を抑える理由なんてどこにも無かった。

ゆっくりと、鼻先をサンダルの最も濃く汚れた

場所へと近づける。

——右足の、親指の跡。

黒く染みついた部分に、鼻をそっと押し当てた。

……ツンツ。

嗅いだ瞬間、サンダルゴム臭と、ツンとした刺激が鼻腔を突く。

酸味。擦り付けられた皮脂の香り。

そして、その奥からじわじわと立ち上がってくる……濃厚な、納豆のような足の匂い。

(っ……本当に……やばい……これ……)

生乾きの布のような臭気。

パンプスの中で熟成された汗の匂い。

その奥に、ふわりと漂うレストランで働く品のある女性らしい香水のような残り香——それが逆に、女の匂いとしてのリアリティを増幅させる。

（信じられない……あんなに綺麗な綾乃さんが……こんな足の匂いをさせてたなんて……）
脳が焼ける。

理性が、とろけていく。

綺麗で可愛くて色っぽい、元 CA の美人人妻に履かれたサンダルが——

こんなにも汚れて、臭くなっているという事実。

それを今、自分だけが味わっているという背徳感。

もう……限界だった。

悠真は、震える手でズボンのベルトを外し、腰を浮かせて下ろす。

トイレットペーパーをカラカラと巻き取り、股間に沿える。

そしてもう一度——サンダル親指跡に、思いきり鼻を押しつけた。

ツンツと酸っぱくて、生臭くて、むわっと熱を帯びた匂い。

たまらず、鼻をすり寄せ、さらに深く、強く吸い込む。

——クン……クンッ……

指の形に凹んで汚れた指跡が鼻先に触れる感触。

それさえも、彼には快感だった。

「……綾乃……さん……」

無意識に名前が漏れる。

憧れの綾乃の足の匂い——

可愛い制服を着て、綺麗な顔をしながら、ストッキング越しにパンプスで蒸れ切った、その足裏の記録がここにある。

トイレの中。

誰にも見られない密室の中で、

自分だけのフェチを、サンダル匂いで満たす。

もう、何も考えられなかった。

手が勝手に動き、

荒い息が喉を抜け、

興奮の熱が一気に爆発する。

「っ……あ……くっ……！ピュッ！……ドピュ！……」

サンダルの指跡に鼻を押し当て、鼻から息を吸

い込んだ直後——

便座の上で、トイレットペーパー越しのいきり
立ったペニスを握りしめたまま、

悠真は盛大に射精した——。

トイレの個室。

その静寂の中で、鼻先にはなおも漂う、濃く湿
った“足の記憶”。

しばらく動けなかった。

綾乃のサンダルの匂いが、まだ鼻に残っていた。

(……やってしまった……)

けれど、後悔など一切なかった。

むしろ、満たされたという実感。

そして――

(……次は直接嗅いでみたい……)

“あの足”に直接触れてみたい。

このサンダルの匂いの元。

“ストッキング越しの蒸れた足の匂い”をなんとか直に嗅いでみたい。

そう思った瞬間、悠真の中にまた新たな熱が湧き上がってくるのだった。

しばらく、トイレの中で呼吸を整える。

サンダルの匂いがまだ鼻の奥に残っている。

蒸れた汗の酸味。納豆のような発酵臭。

(……落ち着け……もう、そろそろ行かないと……)

名残惜しさを押し殺しながら、精子がべっとりと付いたトイレットペーパーを流し、手に持っていたサンダルを丁寧に玄関へ戻す。

元の位置に置き直し、まるで何事もなかったかのように振る舞いながら、深く息を吸ってリビングへと戻った。

「おかえりなさ〜い。あと少しでできるから、座っててね〜」

エプロン姿の綾乃が、振り返って明るく笑う。

その笑顔が、あまりに自然で、あまりに優しい。

たった今、その綺麗な女性のサンダルの匂いを
嗅いで果てたという現実。

(……無理だ、また……)

下半身に、じわじわと熱が戻ってくる。

理性で抑え込もうとしても、視覚と記憶が連動
して、体が反応してしまう。

(……ダメだ、違うこと考えろ。料理……料理
に集中だ)

無理やり話題をすり替えるように頭を切り替え、悠真はソファに腰を下ろした。

すこしだけ冷たくなった手を膝の上で握りしめ、目の前のキッチンへと意識を向ける。

やがて、コンロの火が落とされる音。

皿の上に何かを盛り付ける軽やかな音。

「——お待たせ～！ はい、できたよ～。食べよっか！」

綾乃がトレイを持ってやってきた。

笑顔とともに、テーブルに料理を並べていく。

手際よく配置された白いプレートには、オシャレなサラダと、艶のあるパスタ。

バジルとガーリックの香りがふんわりと立ちのぼり、空腹を刺激してくる。

「……おいしそう……」

思わず、自然と言葉が漏れる。

「ふふーん、そうでしょ～？」

綾乃は得意げに胸を張り、箸とフォークを手渡してくる。

「悠真くんのために作った、綾乃さんお手製パスタだよ？」

これ、けっこう自信作なんだよね～。食べてみて？」

無邪気で、楽しそうで、どこか甘えるような声。

このギャップはあまりにも刺激的すぎた。

色気たっぷりの年上の人妻。

元CA。

美人で、可愛くて、料理も上手で、優しくて――

それなのに、足の匂いは、あんなにも濃く、湿っていた。

(……考えるな……今は料理に集中しろ……)

邪な思考を振りほどくように手元のフォーク

を強く握る。

「……いただきます」

パスタをフォークで巻き取り、口元に運ぶ。

「……ッ！！」

「これ……ほんっとうに、美味しいです……」

あまりのおいしさに手が止まらない。

最後の一口を飲み込んで、悠真はフォークを置きながら、心からの感想をこぼした。

「これ、お店開けますよ、普通に。綾乃さん、

料理めちゃくちゃ上手ですね」

「え～、ほんと？ 褒めすぎだよ～（笑）」

綾乃は照れくさそうに笑いながらも、頬がふわりと緩んでいた。

「でも……ありがとね。そう言ってもらえると、嬉しいな」

テーブル越しに向けられるその笑顔は、どこかほんのりと温かくて――

まるで、何かを許してくれているような優しさが滲んでいた。

「悠真くんがそんなに美味しそうに食べてくれて、私も嬉しいよ。

……いつも、だいたい一人だからさ。

たまに旦那が帰ってきて作ることがあっても、何にも感想とか言ってくれないし…」

ぽつりと漏れたその言葉に、一瞬、綾乃の表情が寂しげに揺れた。

けれどそれもすぐに、明るい笑顔でかき消される。

(……綾乃さん、本当はずっと寂しかったんじゃないか……)

「綺麗で、料理も上手で……優しくて。

旦那さん、ほんと、最高すぎませんか……」

思わずこぼした本音に、綾乃はまた、くすっと笑う。

「もう～、ほんと褒めすぎ（笑）

でも……ありがとう。

悠真くんと話してると、なんかね……私、すごく楽しい」

その言葉に、胸がきゅっとなった。

「またいつでも食べに来ていいからね？」

「……ほんとですか？」

「うん、もちろん」

「……毎日でも食べたいくらいです。ぜひ、また食べさせてください」

気づけば二人は、自然な距離で笑い合っていた。

* *

食後、綾乃がキッチンに立って皿を洗い始める。

エプロン姿で、手際よく食器を片付けるその後ろ姿。

その細い腰のライン。

ストッキング越しのキュッと引き締まった足首。

(……今なら、言えるかもしれない)

食事で満たされたあとの心地よい余韻。

そして、先ほどトイレで抑えきれない欲望を解放してしまった、あの記憶。

その両方が混ざり合い、悠真の背中をそっと押す。

——言うなら、今しかない。

「あの……」

綾乃が軽く振り返る。

「さっきは……本当に、美味しいご飯、ありがとうございました」

「あはっ、そんな改まらなくても～」

「……それで、もしよかったらなんですけど――

――

さっき言ってた“足のマッサージ”、本気でやらせてもらえませんか？」

ふと、綾乃の動きが止まる。

しばし沈黙ののち――くるりと身体をこちら

に向けて、ふんわりと微笑んだ。

「え……ほんとに？ 冗談かと思っていた（笑）」

「いえ、本気です」

できる限り真剣な眼差しを向ける。

綾乃は一瞬だけ目を見開き——それから、いたずらっぽく微笑んだ。

「じゃあ……せっかくだし、お願いしちゃおっかな～？」

その言葉に、悠真の胸が大きく跳ねた。

「実はね、最近ずっとパート続きで……けっこ

う足、疲れてるんだよね～。

パンプス履きっぱなしでむくむし、本当大変で…」

「はい……ぜひ、任せてくださいっ」

椅子から立ち上がった悠真の声が、やや上ずっていたのは自分でも分かった。

けれど——それはどうしようもなかった。

(……ついに綾乃さんの足に……直接触れられる……)

あの綺麗な足。

いつもストッキングに包まれている色っぽい
あの足を——

ついに、自分の手で……。

興奮と喜びが混ざり合い、手のひらがじんわり
と汗ばむ。

いよいよ、境界線を超える瞬間が——近づいて
いた。

「——じゃあ、ここに仰向けに寝てもらえます
か？」

悠真は、リビングのロングソファの端を指差し
ながら、できるだけ平静を装ってそう告げた。

「ここで良いの？ うん、わかった～」

食器の片付けを終えた綾乃が、軽やかにエプロンを外しながらソファへと向かう。

横を通る綾乃の髪からふわりと香る甘い匂い——その奥に、ほんのわずかに、仕事終わりの汗の匂いを感じたような気がして、悠真の心拍が跳ねる。

「こんな感じでいい……？」

そう言って、綾乃はスリッパを脱ぎ、ロングソファに仰向けに横たわり、脚を自然に投げ出した。

ソファの肘置きに、すらりと伸びたふくらはぎを引っかけるように乗せ、リラックスしたようにゆっくりと目を閉じる。

そして、悠真の目の前に――

薄いストッキングに包まれた、まさに仕事終わりの綾乃の足裏が、無防備に晒された。

(……っ……！)

視線が、吸い寄せられる。

つま先からかかとまで――完璧に整った形。

だがその美しい輪郭の中には、明確に“仕事終わりのストッキング足裏の使用感”がにじんでいた。

パンプスで長時間締めつけられたつま先は、じんわりと黒ずんでいる。

足裏には、ポツポツと細かいホコリや靴の中のゴミのようなものが張り付き、光沢のあるナイロンがまだわずかに湿気を帯びているのが分かる。

(……これ……絶対においする……)

わかる。

見ただけでわかる。

今日もパンプスを何時間も履き続けた、レストランで立ち仕事をこなした後の使用感たっぷりの綾乃のストッキング足裏が、目の前にあるという現実。

「じゃあ——いきますね……」

喉が詰まりそうになりながらも、悠真は両手を綾乃の足にそっと添えた。

ふにゆ。

柔らかい。

けれど芯はある。

ストッキング越しに感じる足裏の感触——

そこには、単なる皮膚の感触ではなく、今日一日仕事を頑張った証がしっかりと詰まっていた。

親指の腹で、土踏まずを押しながら、指全体でかかとを包み込むように揉む。

続いて、つま先の付け根から足指へと、少しずつ力を加えながら丁寧に揉みほぐしていく。

「ああ……気持ちいい……」

可愛い声が漏れる。

綾乃が目を閉じ、頭をクッションにもたれさせながら、ぽつりと息を吐くように声をこぼす。

(……やばい……)

あまりにも、可愛い。

あまりにも、無防備。

さっき嗅いだあの濃厚なサンダル匂い。

そのインソールにたっぷりとしみ込んでいた足の匂いが——今、この目の前の足裏から発せられているという事実。

それを想像するだけで、理性が壊れそうになる。

(……この足が……あの匂いを……)

美しい足。可愛い声。

それにまつわる現実の“蒸れと臭い”。

ギャップが強烈すぎて、脳が正しく働かない。

悠真の股間は明確に、はっきりと反応していた。

「……少し……足動かしますね……？」

掠れるような声が漏れる。

綾乃は目を薄く開けて、微笑んだ。

「うん……いいよ」

その一言で、理性の最後の糸が、ぷつんと切れた。

両足をしっかりと掴み、悠真の鼻先が、徐々に綾乃の足裏へと近づいていく。

目の前には、パンプスで蒸れたあとが色濃く残る、薄いストッキング越しの足裏。

つま先の黒ずみ。

足裏に張りついた微かなゴミやホコリ。

それを、悠真がじっと見つめながら、顔をさらに足裏へ寄せていくのを見て――

「……悠真くん……」

綾乃の声が、ふわりと漏れた。

「そんなに……足裏に顔近づけられると、ちょっと……恥ずかしいよ……」

恥じらうように、彼女は足の指先をわずかにすぼめた。

「だって……仕事終わりだし、まだお風呂入ってないし……」

視線を外し、ほんの少し頬を赤らめながら言う綾乃。

(……やばい……もう我慢できない……)

その“匂いを気にする仕草”こそが、悠真の癖をピンポイントで刺激してくる。

もう、どうやっても抑えきれなかった。

「大丈夫ですよ……」

ほんの数センチ先に、憧れの女性の蒸れた熱を保ったストッキング越しのつま先がある。

この状況で我慢などできるはずがない。

投げ出された綾乃の両足裏を正面からしっかりと支え、揉みほぐしながら顔をゆっくりと足裏へと近づける――

足裏と鼻の距離が縮まるにつれ、こもった空気がふわっと漂ってくる。

「……！」

それは、明らかに“足の匂い”だった。

「……ああ……」

(……はっきりわかる……)

この匂いが——この綺麗で無邪気で優しい綾乃さんの足から発せられているという、そのギャップ。

ウエイトレスの仕事で汗をかいた足。

蒸れて、臭くなっている足。

——それを自覚して恥じらいながらも、隠しきれない女のリアルな匂い。

至近距離まで顔を近づけ、足裏を揉む悠真を少し不安で恥ずかしそうな表情で見つめる綾乃。

「ねえ……そんなに顔近づけたら……匂いしちゃうから……」

漂ってくる確かな足の匂いと、恥ずかしがる綾乃の表情がむしろより悠真の性癖を刺激する。

「大丈夫ですよ……綾乃さんの匂いなら……むしろ、好きなんで……」

口からこぼれたのは、偽りのない本音だった。

綾乃の目が、ぱちりと開く。

そして——安心したかのようにふっと、唇の端が緩んだ。

「……悠真くんって、やっぱり……匂いフェチ

だよね…？」

「……はい」

取り繕いもせず、真っ直ぐにうなずく悠真。

股間が脈打つのを感じながら、それでも綾乃の瞳から目を逸らさない。

「綾乃さんみたいに綺麗な女性の匂いなら…
…大好きです」

一瞬だけ沈黙が流れる。

そして——綾乃はくすりと笑った。

「ふふっ……ちょっと変態さんだね」

柔らかく、でもどこか挑発するような微笑み。

「でも……なんか、不思議と嫌じゃないや」

綾乃の声が、ほんのわずかに艶を帯びる。

「さっきも、エレベーターの中で……ふざけて
サンダル匂いの匂い、嗅がせちゃったけど——」

「……臭かったでしょ？私のサンダル……」

言葉の端に、ほんの少しだけ、恥じらいと挑発
が混ざっている。

あえて“臭い”という言葉を選んでいる綾乃の口
調が、悠真のフェチ心を限界まで刺激する。

「……悠真くんは、ああいう匂いが……好きなの？」

「……足の匂いで、興奮しちゃうの……？」

優しく、でも明確に“踏み込む”ような言い方だった。

悠真の胸が高鳴る。

「……はい」

「……綾乃さんの足の匂いに、正直……すごく、興奮してます……今も……」

喉が詰まるような熱を感じながら、けれど嘘偽

りなく——告げた。

「……すみません……」

俯きかけたその瞬間——

「ふふっ……そうなんだ……」

綾乃が、嬉しそうに目を細めた。

「じゃあ——そんなに好きなら……」

「いいよ……？ 嗅いでも……」

その言葉に、悠真の脳が一瞬で沸騰した。

「え……本当ですか……？」

息を詰めるような声で聞き返す。

綾乃は、優しく頷いた。

「うん」

「悠真くん……なんか可愛いし。

私なんかの足で、そんなに興奮してくれるなら——」

「嗅がせてあげる……」

その優しさと許しの言葉が、なによりも甘く、熱く、狂おしかった。

「……ありがとうございます……！」

声が震えた。

夢のような展開。

数時間前には想像もできなかった光景が、今、自分の目の前で現実となっている。

喜びと興奮が、一気に爆発しそうになる。

頭が真っ白になる。

(……嗅げる……綾乃さんの足を……おもいっきり……)

本人から直々に許可をもらえた。
もう我慢する必要は無い。

その瞬間、悠真は——本当の意味で、“理性の崩壊”を迎えようとしていた。

「じゃあ……失礼します……」

震える声でそう告げながら、悠真は両手で綾乃の足首を支え——

ついにその顔を、ストッキング越しのつま先へと近づけていった——。

【この先の展開】

●ついに憧れの綾乃から直々に許可をもらい、仕事終わりで見るからに匂いそうなストッキング足裏に鼻を押し付け匂いを嗅ぎ、脳がとろける程の興奮と快楽で頭がおかしくなりそうになる悠真。

●自身の恥ずかしい足の匂いを嗅ぎながら、明らかに性的に興奮している悠真を前にするも、綾乃は大人の余裕で悠真の癖を受け入れ、自らの足と言葉でさらに悠真を優しく挑発し、悠真の反応を見て楽しみ始める綾乃。

●自身の性癖を完全にさらけ出し、それを綾乃に受け入れてもらい天にも昇る思いの悠真。さらに今度来た時は綾乃が CA 時代に履いていたパンプスの匂いを嗅がせてもらえるという約束まで取り付ける。

●いよいよ約束の日。仕事帰りにマンション前

で偶々綾乃と鉢合い、そのまま綾乃の家へ向かう。そこで待っていた予想以上の綾乃からのサプライズと更に積極的になった綾乃からの足と靴、言葉を使った責めに正気を保つのが難しい程の興奮で脳がとろけ、言葉にできない程の幸福感に包まれながら複数回絶頂を迎える悠真……etc。

ずっと憧れだった美人人妻お姉さんに性癖を受け入れられ、抑えていた欲望が一気にあふれ出す…。

目が離せない後半はフェチ描写にこだわったフル挿絵付きの製品版でどうぞ！！